

## 「日蓮の誓願」

渡 辺 宝 陽

今日は名譽あるお席にお招き頂きまして、それにお応えするようなお話はできませんが、折角お招きに預りましたので、少しお時間を頂きたいと存じております。

もう三年ぐらいになりますか、日本航空の飛行機が、バランスを失って三〇分ほど飛んで、群馬県の御巢鷹山という所に衝突し、炎上した事故がございました。その時、私どもの友人が住む、群馬県の藤岡という町がございました。その御巢鷹山との間は、普段は非常に遠い所なんです、ヘリコプターで行きますと二〇分かそこらで行き来できるような所で、遺体収容に当たったのでございます。その時に当然のことでしょうけれど、まずその遺体にお経をあげて欲しいと、遺族の皆さんが願ひ出たそうでございます。大変人数も少ないな同市仏教会の奉仕でご回向を行ったとのことです。そういった中で「ちょっと待って下さい。私どもの宗旨のお経と違います。」というふうな宗旨にこだわった方々があったそうです。一つは本願寺さんの方で、もう一つは日蓮宗だったそうです。このように浄土真宗と日蓮宗の信徒の方は、明確に自分の信仰の型というものを持っている。と同時に信仰の心というものを持っているということを、痛切に彼が感じ、そのことを話してくれたことを思い起こします。

しかし浄土真宗と日蓮宗というと、現在でこそ交流がありますが、昔はそうではありませんでした。日蓮宗の説教師が、北陸方面へ出かけまして、単に説教だけでは人が集まりませんので、当時は二枚鑑札ということで、忠君愛國の映画を持って行き、映画の弁士の鑑札によって、それを映写したあとで、日蓮聖人の話をすると、当然「四箇格言」ということが出てきます。そうすると門徒の方からの強い憤りを受けたなどということを開いたことがあります。そのことと同時に浄土真宗のお寺がある地域というのは、日蓮宗の方でも、非常に熱心で、聞法の心が強く、信仰の論理を持つ傾向が強いようです。同時に日蓮宗の側から見ると、ご門徒の中で日蓮宗の御祈禱を受ける方もあるというように庶民レベルでは宗派を超えた交流があります。これは今日の日本の仏教にとって一つの課題だろうと思います。

そういった中で、先程、鍵主先生もお話し下さった訳ですが、曾我量深先生が、明治三七年に『精神界』という雑誌の一月から一月までの七回にわたりました日蓮のことを書いておられます。『曾我量深選集』が刊行されました時に友人に勧められて購入致しまして、そのままにしておりました。しかしこの『日蓮論』というのを拝見いたしました。非常に驚きます。明治のそのころというのは、非常に宗派意識、門徒意識というのが強かったと思います。そういうの中で日蓮の宗教を勉強し、ある意味で非常に共感を示しておられます。伝え聞くところによりますと、曾我先生はお若い時に、かなり日蓮にご関心が深かったというふうにも伺っております。

「本化上行の現れとしての日蓮と、如来の化現としての親鸞」というふうな論題から始まって、「現代思潮と四箇格言」以下、七編にわたってお書きになっておられる。その四回目の明治三七年七月号に、「敵は善人なり、友は悪人なり」という言葉を掲げています。私はこの「敵は善人なり、友は悪人なり。」の本になっている「今の世間を見るに、人をよくな(成)すものはかたうど(方人)よりも強敵が人をばよくなしけるなり」(『種種御振舞御書』)という言葉が非常に好きです。日蓮は、「味方よりも敵が自分を強くしてくれるんだ。」と言いました、次々と襲って来る

法難を却って喜びとして受け止めると言っております。曾我先生はその言葉を取りまして「敵は善人なり、友は悪人なり。」と言ひ、寧ろ最初から味方と思つてゐる者は、本當の味方には成らないという宗教觀を述べておる訳です。

明治三七年というのの一体どういう年かと言いますと、ちょうど前々年の明治三五年は、日蓮の立教開宗六五〇年という年に当ります。ご承知のように、本願寺さんの方と日蓮宗の方とは大分状況が違ふんですけれども、明治維新によりまして、仏教は非常に壊滅的打撃を受けます。そういう中で西本願寺さんの方は、明治新政府との關係で最初から非常に有利な条件をお持ちになつてゐた。東本願寺さんの方も、初期には色々なことがあつたようですが、しかしその後はやはり政府とうまくやつていらつしやる。そういうものに対して他の既成仏教教團の態度は、どちらかといへば、政府に懇願して教團を支える組織を守つたように思えるのです。日蓮宗には各地域に浄土真宗と同じように講というものがございました。日蓮宗初代管長新居日薩は各地の講を妙法講の何番というふうに一元化しまして、その上、日蓮宗の布教は致さない誓約し、そして明治政府が提唱する敬神愛國ということを中心とする三条教則を布教致しますから、是非存続をお認め頂きたいと懇願してゐるのです。

そういうものに対する日蓮宗の中の反発がありまして、皆さんのお耳に留まつてゐるかも知れませんが、田中智学は立正安国会を作ります。そして、これが後に国柱会と名称を変更します。厳密に言いますと、大正三年からは国柱会と称し、それ以前は立正安国会と言いますが、話を分かり易くするために国柱会という名前を使わせて頂きます。この田中智学ばかりでなく日蓮宗の中でも何かしなければいけないという空氣がありまして、明治三五年（一九〇二）立教開宗六五〇年を期して盛大に日蓮宗の復興・復活運動を行なうということで、上野公園に大勢の人が集まつたり、東京市内を練り歩いたり、かなりのデモストレーションを行つております。この田中智学が、明治三六年、つまり曾我先生が『日蓮論』をお書きになる前年に、『宗門の維新』を書きます。これを知識人に千冊ほど配つたのです。その中に当時非常に華々しく評論活動を行つておりました高山樗牛がおります。樗牛は最初、読売新聞の懸

賞小説に『滝口入道』という小説で入選しまして、世に出た人なんですけれども、その後は『太陽』という月刊雑誌に評論を連載し、オピニオンリーダーとして評判をとっておりました。その高山樗牛が、日本主義からニーチェイズムに転向致しまして、それでなお且つ悶々としております時に、田中智学から『宗門の維新』という本が送られます。形は伝統を守って古いものを守り、そしてその精神はよりラディカルにあれという『宗門の維新』の主張に高山樗牛は大変共鳴を致しまして、ニーチェ主義（精神主義）から今度は日蓮主義へと変わるということになったのが、明治三六年でございます。

それからもう一つは、現在われわれが用いている日蓮の遺文は、年代順に並べられて、編集されております。これは幕末から明治初期にかけて小川泰堂というお医者さんがそれまでの研究をもとにして、編纂した『高祖遺文録』が底本になっております。ところが『高祖遺文録』はなにしろ和本でございますので、持って歩くのに大変不便だというところで、一冊の本にするため、加藤文雅が宗門内の協力を得て活字本を作ったのであります。しかし、遂に明治三五年には間に合わず、翌々年の明治三七年にこれが出来上りました。こういうふうには日蓮の関係では、明治三五年前後というのは非常に盛り上がった年代なのです。曾我先生が『日蓮論』をお書きになったというのも何かそういうことと、あるいは関係があるかもしれないというふうに思います。もし何かお心当たりがありましたらお教え願いたいと存じております。

そういうことで明治三七年、一年間お書きになって、相当勉強しておられると思います。私どもは日蓮の著作類を総括して御遺文と言っておりますが、曾我先生はその御遺文を非常に精しく読んでおられました。それも形式的ではなくて、内容的にまさに真宗の教学者のお立場から非常によくお読みになっておられます。私どもが今問題にしている、「日蓮における罪意識の問題」についての理解も深く、それから「上行菩薩としての積尊の本弟子としての自覚」についても、その内面的な面を非常に深く理解しておられます。

例えば「上行の化現としての日蓮と、如来の化現としての親鸞」という所には、このようなことを言っておられません。要約してお話し申し上げますが、「本化上行の現れとしての日蓮が、自力教最高の模型としてその極限を示し、破邪的・消極的方面より吾人に絶対他力の教義を鼓吹した」と、つまり日蓮が自力教としての最高のモデルを示したと理解しています。「それは即ち我々に絶対他力の教義を鼓吹するものであるというふうに我々には受け取れる」というのです。そして「後方より法然・親鸞の二方を援助していると知らず、今の世の他力教の日蓮たるものは果たして誰ぞ」と、「他力の教えの中で日蓮の如く激烈に教えを伝えたるものは誰か」という問いを發しています。勿論曾我先生でございますから、非常に褒めながらも、最終的には親鸞聖人を最高としておられることは言うまでもありません。しかしそういうふうに日蓮を自力教の最高のモデルであるというふうにまで言っておられません。

明治四〇年四月に、やはり『精神界』でお書きになっておられます。「インド・シナ・日本仏教の特色を論じて親鸞上人の地位を明らかにする」という長い題なんです、その中にこんなふうに言っておられます。「本化上行の自覚は、久遠実成の教主釈尊の实在の自覚となり、愚禿親鸞の自覚は、大悲本願より成仏し給いし西方阿弥陀の存在の信念となったのである。この二つの自覚は、誠に日本仏教史上の双美である。」と、このように非常に誉め称えておられる訳であります。そういうふうに、曾我先生は非常に奥深く、また内面的に日蓮を捕らえておられることに、われわれは非常に啓発されます。

## 二

日蓮の生誕は、親鸞聖人がお生れになってから四九年後の一二二二年、貞応元年二月一六日でございます。ご承知のように二月一五日は釈尊涅槃会でありまして、従来、二月一六日の生誕は、釈尊亡き後を継ぐということの意味するのだと理解されています。千葉県房総線に乗って参りますと鴨川という所があります。その鴨川からは特急で行

きますと、その手前の停車駅に小湊という浜辺に面した駅がございます。房総半島の突端に近くそこに立ちますと、太平洋航路を往く船の行き来が見えるというような場所でございます。そのような地で日蓮は生誕いたしました。親鸞聖人が京都にお生まれになったのとは、全く対照的であります。

一二才のとき、学問をするために清澄寺に登りました。この清澄はこの頃は台密の寺でした。そこにまず一二歳で山に登りまして、一六歳の時に得度をいたします。後に日蓮は、この寺は遠国の寺であって、読みたい本も読めない。不便な所であったと言ってます。しかし、『授決集』という天台関係の本を注釈しました『円多羅義集』を、日蓮一七歳の時、清澄で写した写本が、昭和になりましたから金沢文庫で発見されました。鎌倉と房総半島の突端にありません。清澄寺とは、非常に行き来がありました。現在でもフェリーに乗ってみますと、東京湾入り口まで、ごく僅かな時間で往復出来ます。そういうことでございますので、鎌倉とは非常に近い関係にあったというふうに考えられます。

あとで少し触れさせて頂きますが、色々な災害が起きたということを発端として、日蓮が『立正安国論』というものを書きます。その元々の土壌というのは、日蓮の出家にあったというふうに考えられる訳です。私はその意味で、鎌倉新仏教の宗祖たちの中で、日蓮の出家の仕方は少し違うというふうに感じております。どういうふうに違うかと言いますと、個人的無常感というふうなことよりも、やはりその地域の悩みとか、その地域の人々に推されて勉強したのではないかというふうに、私は感じております。その一つの表れとしまして、ちょうど一七、八才の頃、日蓮は本が無いと言いながらも、それなりに色々勉強するわけです。そこで「日本第一の智者と成し給え。」という祈りをするのです。智者とは智慧のある人です。というのは、色々勉強していくうちに、どうも分からない所だけである。それを知るためには真実に仏教を知る智慧が必要であると考えたのです。この辺も全く親鸞聖人と違い、対極にあります。そこで虚空蔵菩薩に祈願します。「日本第一の智者と成し給え。」と祈り、断食し、お経を読み、修行を重ね、そして二一日目の明け方、虚空蔵菩薩から袖の中へ智慧の宝珠を授かるという神秘的な体験をいたします。真言宗の

方の御理解では、これは求聞持法の実修だったと思います。そんなことがありまして、二〇才の頃、鎌倉へ勉強しに行き、そしてあらためて二一才（いずれも数え年ですが）の年、比叡山に勉強しに出掛けるのです。そして三二才まで勉強に専念するのです。その間の事跡については、あまりはつきりしません。残っておりますのは覚鑿の『五輪九字明秘密釈』を京都の五条坊門何某という所で、書写した写本が、現在、中山法華経寺の宝蔵の中にございますが、殆どそのくらいです。比叡山以外にも行っておりますが、何処へ行ったことは分かりません。比叡山では横川に留ったといわれていますが、それ以上細かいことは分かりません。後世の伝記には、高野山へ行ったり、あるいは奈良など、方々へ行ったと記されます。因に東大寺が再建されて五〇年ぐらいですから、日蓮は木の香もまだ新しい東大寺の前に立ったこともあるかなと推測されるのです。親鸞聖人は九才から二九才の二〇年間、比叡山に留学されたということでございますし、それに対して道元禪師は二年、日蓮の場合はほぼ一〇年というふうに考えられます。言うまでもなく比叡山の横川という所は、鎌倉新仏教の開祖たちが皆そこで勉強した所なのですが、それだけでなくそれ以前に、恵心僧都源信のもとに、当時の上流貴族から在地農民まで救いを求める人たちが集まって、二十五三昧修法会や勸学会を行っており、興味深いのですが、そういう所で日蓮も三二才の時まで勉強を致しました。

浄土教は、法然上人の『選択本願念仏集』に示されるように「選択」ということが基本になっていると思います。勿論この意味は、自然法爾まで高められることでございましょうけれど、言葉としますとその「選択」に対して、日蓮は「総合」ということを基本としておると思います。そのために「勝劣」を見極めて行き、結論的には、法華経を至上の教えとし、法華経こそ末法を救う教えであると認識しまして、三二才、建長五年の春に清澄に帰り、四月二八日に最初の信仰告白を行うのです。道善坊の持仏堂の南面で、僧侶たちに向かって話をしたということを、日蓮は後年、何回も書いています。

日蓮は、非常に多くの手紙を書いています。主要御書としては五大部（五大著作）があり、それ以外にも多少纏ま

ったものがありますが、大部分は手紙として書かれたもので、四百篇以上あります。手紙は差し出す相手によって表現が変わります。富木常忍は中山法華経寺の基を開いた人ですが、この方には何かあると必ず自分の心境を託して、今自分はこのような所に居るとか、或は心境であるというようなことを書いています。また四条金吾という直情経行で熱心な方に対しては、非常にザックバランに語っています。「あなたは腹黒い人である」といい、短気で直ぐ怒ってはならないと注意し、「法華経には常不軽菩薩という御方がおられるが、この菩薩はどんなに殴られても平然として、人々を拜んでおったではないか。」とか、或は「周公旦という方は、お風呂に入っている間に人が三度も尋ねて来ると、その度毎に弁髪（べんぱつ）の長い髪を巻いて出てきて、湯冷めすることを考えずに対応したというではないか」などと親身になって日常生活に指針をあたえています。そういう手紙の中に、「建長五年四月二八日に自分は少々の法門を申し始めた」と、折々に書いています。安房という所は田舎であり、東海道から数えて一五ヶ国の内、一二番目か一三番目の端っこの方です。そしてもうちょっと東山道の方へ行きますともうまもなく蝦夷（えまゐ）に近づくところですから、当時としますと恐らく学費を出すというのも大変だったと思います。ところが、そういう人たちの期待に背いて、当時流行している浄土教信仰を否定し、法華経でなければならぬということを言い出したものですから、聴衆の人々は騒然となり、「何をやって来たんだ。」「何を勉強して来たんだ。」という批難の聲がまきおこり、日蓮は山を降りざるを得なくなったのです。（なお、最近、高木豊教授が、即刻山を降りたのではなく、一年ぐらい経ってからではないかという見解を発表しています。）

ともかく日蓮は清澄を追い出され、鎌倉に出掛けます。ご承知のように当時鎌倉は、源頼朝によって鎌倉幕府が開かれてから五〇年ぐらいであり、鎌倉時代の中期の末頃になります。その頃になりますと鎌倉幕府も武家政権を充実することに一生懸命であり、臨済宗の、中国から渡ってきた僧侶などを招請して、所謂鎌倉五山（かまくらごさん）というものを建立するなどしている時代でした。たとえば、日蓮が鎌倉へ出た建長五年の二年後、建長七年には建長寺が建立されます。



このようにこの頃は非常に仏教が盛んになっていったともいえますが、日蓮は別な角度から、それは真実の繁栄ではないと批判しているのです。日蓮はそうした状況のなかで信仰告白をしているのですが、ハムレットの「生きながらえるべきか。死ぬべきか。」ではありませんけれど、言うべきか、言わざるべきかということ、ずいぶん悩んだことを、主要著書である『開目抄』の中で書いています。すなわち、法華経の予言に従えば、自分は法華経こそ末法の衆生を救う教であることを明らかにしなければならない、言わなければ死んでからお釈迦様の御前に行くことは出来ないし、八大地獄のうちの大阿鼻地獄に堕ちてしまう。と言ってその事を口に出せば、たちまちの内に迫害が起きるだろう。そういうことで、どちらにしたらよいのか、やはり相当ためらいがあったわけです。しかし言わなければならぬということ、で建長五年四月二八日、信仰告白をしたのです。そして、このとき、日蓮は「我れ日本の柱とならむ。我れ日本の眼目とならむ。我れ日本の大船とならむ。」という誓願を立てたのです。

### 三

このように三大誓願を立てたことは佐渡へ流された時に書いた『開目抄』で始めて明らかにされました。佐渡に流される前、日蓮の生涯で最大の法難である龍口法難を受けました。江ノ島の対岸の竜たの口で深夜ひそかに首を切られる直前まで行きますが、奇跡的に助かり、佐渡へ流されます。佐渡へ流されても、まだまだ危険は続きました。そこで日蓮は自分の遺言として、自分が法華経をどのように読んだのか、仏教の中で法華経がどういう位置付けにあるのか、我々はどうしなければいけないのかということ、遺言として書いたのです。その『開目抄』の中の、日蓮の「我れ日本の柱とならむ。」以下、三つの誓願というのは、日蓮がただ勝手に言っているのではない。釈尊（大覺世尊）は三つの徳を持っていらっしゃる。その三つの徳というものを、知らなければならぬと言いう意味で言っているのです。

この教主釈尊の三つの徳というのは、先ず第一には主の徳。簡単に言えば国王の徳、国王の徳です。それを高めていったところが全ての人々を治めるといふ釈尊の高大なお徳に到達するということです。

第二には師の徳。精神指導者にもさまざまな段階がありますが、その中で最高の精神指導者であるということです。第三に親の徳。一般に親は子を愛し、子は親を敬うものであると思われていますが、日蓮は「子というものは、不孝を犯すものであって、酷いものになると、臭みたくに親を食べてしまおうし、破鏡はげという獣（獵）は父親を食べてしまおう」といい、その反面、「子は親に孝行・孝養を尽くす子の例を挙げて、それを讃えています。日蓮は中国の故事に興味を持ち、そうした譬えを頻繁に挙げて、普通の親の徳を超えた最高の情愛・慈愛を親徳と言っているのです。

そうして、釈尊は一切衆生の大導師であり、大眼目であり、大橋梁・大船師・大福田であると位置付けて、釈尊の教えが仏教を統括する根本を成すものであり、最終的にお説きになったものが法華経であると日蓮は断言します。それに対して、今非常に乱れた世の中で、日蓮は日本の人々を最終的に釈尊に代わって治め、そして日本の人々の最高の精神指導者・最高の救い手となる。つまり、大きな船の船長さんと成るといふことを誓っている訳です。

このことともう一つペアーになっている考えが、日蓮といふことを名乗ったといふ事実でございます。改めて他の方々のお名前というものを調べてみますと、大体において例えば宝地房証真とか、或は法然房源空であるといふふうな房号があります。先程も申しましたように日蓮も若い時には、是聖房蓮長と名乗っています。三二才のときに日蓮と名乗ってからは、日蓮といふ二文字以外は使っていません。勿論「日蓮房」とか、「日蓮聖人」とか他からの呼び方がありますが、名前としては「日蓮」としか使いません。では日蓮とはどういう意味なのでしょう。まず、「蓮」については、法華経の従地涌出品第一章には以下のように書かれています。大地が突然割れまして、そして大地から六万恒河沙というのですから、ガンジス河の六万倍という、ものすごく大勢の立派なお弟子たちが現れる訳です。釈尊のお話をそれまで聞いていた説法聴聞の人々は吃驚して、こんな立派な方はどなたですかと言ったところ、釈尊

は、その者たちは自分の本弟子であり、久遠からの弟子であるということを明らかにさるのです。これらの立派な大菩薩たちは、「蓮はすというのは汚れた水の中にあつて綺麗な花を咲かす。それと同様にこの地涌の菩薩もこの濁った世の中で、立派なみ教えを伝える。決して高原などで綺麗な花を咲かすというようなものではなく、非常に濁った大衆の居る社会の中で、み教えを広めるのだ」ということを誓願しているのです。

さらに、如来神力品第二一において、この地涌の菩薩たちに末法の布教を全部委ねることを釈尊が語っていることが、日蓮の教えの一番根本になる訳です。そして日蓮聖人は、自分が上行菩薩じやうぎやうの「応現」(または再誕)であるという自覚に立ちます。地涌の菩薩の四人のリーダーは、上行・無辺行・淨行・安立行の四人の大菩薩であります。つまりお釈迦様の永遠の本弟子である地涌の菩薩たちの代表です。この方に久遠の教主釈尊が末法の布教を任せるといふ属累じゆく委嘱いしゆをされる訳です。つまり、日蓮の『日』というのは、日月(太陽やお月様)が暗闇を全部明るくするように、この上行菩薩が濁った世の中に灯火を示すであろうという意味です。このように、「日蓮」という名は地涌菩薩の最上首、上行菩薩の役割を端的に表わしているのです。

先程も言いましたようにこの地涌の菩薩の代表としての上行菩薩の「応現」という自覚に立つことを表明しますが、五〇才過ぎてからです。しかし実際に能く考えてみると、最初からその役割を果たしていることを自覚しておられたのではないかと。先程言いました三大誓願と、そして日蓮と名乗ったことが最初からペアーになって、日蓮の教学を形成して行ったというように考えられます。

『守護国家論』という初期の著作があります。これは三八才の時、『立正安国論』を書く前年に書いたと言われています。だいたいここに日蓮の教学の基本が語られていると考えられております。その上で、『立正安国論』というものを何故書くようになったのかと言いますと、日蓮は最初から『立正安国論』を書くかと思つて鎌倉へ行つたのではなく、最初からいきなり派手な布教をしたのではなくて、地道に当時天台系の僧侶や信徒たちと『摩訶止観』を読

んでいったのだと思います。

これは後のことになりますが、蒙古が襲来してきます。その時に『摩訶止観』を一生懸命読んでお祈りします。『摩訶止観』を読むことがお祈りなんです。ですから最初から『摩訶止観』を読んでいたというふうには私は考えているのです。

#### 四

三二才の時に鎌倉に行きまして、『立正安国論』を書きましたのが三九才の七月一六日です。ちょうどお盆が終わった翌日ですね。これは意外に意味があるのではないかと思っておりますが、とにかく日蓮が鎌倉に落ちついてからまる七年間が経過しています。つまり三年ほど経ってから、地震が起きます。これは毎年連続する訳ですが、地震が起きて、その翌年には台風が来ます。それから台風が来ると、その翌年には飢饉が起きます。飢饉が起きますと、その翌年には大疫病が流行するのです。これは天変地異といった不思議なことの連続みたいなんです。考えてみますと、地震が起きます、そこへ台風が来るといふことですから、環境が破壊されてしまいます。従ってお米が出来ない。従って飢饉になる。飢饉になり、環境が悪くなっているところへ、流行病が流行する。そういうことだと思えます。

その四年後、文永元年に大彗星が現れ、鎌倉中の人が恐れ戦いた。我々の感覚と違って、当時の人々は非常に神秘的にこれを受け取ったでしょうから、これはもう駄目だという気分が非常に強くなったと思います。それで日蓮はこういう現状に対して、仏教は一体何をすることが出来るのかと、一生懸命考えたのです。伝記によれば、大藏経を隈無く読み返したといえます。恐らく今まで勉強してきたのを勉強し直す。『立正安国論』には『金光明経』『大集経』『仁王般若経』『薬師経』など、当時宮中などでお祈りの為に使われていた、ポピュラーな經典に基づいて最初に論が展開されます。説得性を優先してそうしたのではないかと思います。

『立正安国論』は「旅客来りて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、飢饉・疫癘・天変地異が非常に続いている。その旅人が来まして、庵に住んでいるお坊さんに一体今の世はどうなっているのかという質問をします。」という有名な言葉から始まります。そこから始まりまして、九つの問答があり、最後には客が納得するというところで十段から成り立っている訳です。要するに、仏教が行なわれている様子を見ると、禅宗が盛んに受け入れられ、念仏の信仰が急速に広まっている。真言のお祈りも行われている。しかしそれにもかかわらず、国土社会が不安定であるのは何故か。そうであるのは、仏教のとらえ方に誤りがあるのではないかと疑問を展開して行くのです。最初に申し上げましたように日蓮の宗教というのは、総合ということをも根本としている。仏教というものを総合的に捉らえて、その中心をなすものは法華経であると結論づけた訳であります。

日蓮というと、敵対者を徹底的に批判するとして嫌われるんですが、実は日蓮の内部においては、論理体系を詰めて行くための批判なのであります。私も立正大学の宮崎英修名誉教授が、日本仏教学会で「日蓮の宗教における一般性と特殊性」という講演を行なった趣旨も、そのことを明らかにするためであったのです。そして驚くことには、すでに明治三六年頃、曾我量深先生が、批判を加えながらも、日蓮の宗教に深い理解を示されていることであります。法華経が、一切経の頂点にあるという意味で、法華経の教えを重要視するのです。従って法華経は即ち一切経であり、一切経は即ち法華経である、という日蓮の見解の趣旨を、曾我先生は、法華経は諸経が積み重なりあっているといふふうにとめておられます。それが正しく日蓮の理解であった訳です。ただそういう理解に立った時に、それを障害・妨害するものに対しては、それを否定しなければそれが明確にならないということ、諸宗を批判するわけですから日蓮の宗教は、体験の宗教だといふふうに一言で言われますけれども、日蓮の宗教の基本は、先程言いましたように、三八才の時の著述『守護国家論』で大体理論的には出来上っているのです。そこから現実にはたいして対応して考えなければ行けないということで、『立正安国論』を著して、幕府要路に呈出しました。ただ『立正安国論』は

最初に書いた『立正安国論』のまま終わるのではなくて、憲法の解釈においても憲法動態論というものがあるようですが、『立正安国論』においても、その意味がどんどん変わって参ります。御承知のように『立正安国論』を書いた翌年の五月一二日に鎌倉の浜から連れ去られ、伊豆の伊東という所へ島流しにされます。それを助けたのが船頭の船守弥三郎さんでした。

これは余談に成りますが、慶応大学の国文学者であった故池田弥三郎教授の名前は、「船守弥三郎」に由来するということです。

翌年、伊豆に流された日蓮は、何故自分は法華経でなければならぬのかということを考えて、教・機・時・国・序、つまり教え、それから機根、時代、国、教えが広まる順序（これを教・機・時・国・序の五義と言います）を知らなければいけないことを明らかにするのです。

## 五

伊豆から戻り、故郷の安房へ帰り、鴨川に程近い小松原という所の大路で、日蓮が三二才のとき清澄から追放した地頭の東条影信らが、今度こそ日蓮を殺してしまおうということで大襲いかかって、日蓮は肩間に一〇cmの傷を受けます。この時に「日蓮は日本第一の法華経の行者なり」という自覚に至るのです。さらに五〇才の時、やはり鎌倉の松葉谷の草庵から平左門尉を中心とする人々に連れ去られます。そして夜中密かに殺されようとしています。これを竜口法難と言います。その時の総大将である平左衛門尉が日蓮を捕えようとしたとき、法華経八巻あるうちの第五巻で、日蓮を殴り、さらに投げつけます。その第五巻の第一三章には勅持品があり、法華経を弘めるには、必ず法難にあうことが書いてあるわけです。これで殴られたことは日蓮にとって非常に嬉しいことであった訳で、平左衛門尉という人に「貴方は正に法華経の言うとおりのことをやっている。今、日本の柱を倒そうとしているんだ」というのです。日

蓮は鎌倉市中を引き廻され、深夜、竜口刑場で斬首されようとしています。その時、光の玉が現れた。今日、その光の玉の出現は、本当にあったことかどうかというところで議論が盛んに行われています。そういうことがありまして、佐波の国の地頭であります本間六郎左衛門という人の預りになりまして、相模の国の依智、現在の神奈川県厚木と言う所へ預けられます。それから一ヵ月後に、今度は佐波に流されることになる。その地で筆舌に尽くし難い苦勞をする。厚木を出発したのは現行曆で言えば一二月のことです。シベリアの風が吹いてくる。京都も比叡降ろしですけれども、新潟の方へいきますと、とにかく半年の間は風花が舞っていて、明るくない。半年間というものは陽がささない。そういう中で、実は佐波というとあまり雪が多くないと思うのですが、雪が非常に多く、そこで死んでしまうのではないかと思ったということを、日蓮は書いています。その上、日蓮が押しこめられていた塚原という所の間四方の小さな三昧堂へ、日蓮は怪しからんということで、殺しに来た人がおりました。ところが日蓮を問いつめようとして逆に話を聞くはめになり、なかなか立派な人だったので感服し、今度は逆に毎日人目を忍んで、御飯を運んでくるという人が現れてくる。これが順徳上皇の流罪にお伴をして来た武士で、仏門に帰依して阿仏房と名乗った人です。そういう中で『開目抄』を書くのです。その内容は先程申したような内容です。色々なことがありましたが、結局自分が言ってきた、自分が最初考えてきた通りのことになってきた。そして今こそ自分が実際に体験し、身をもって明らかにした法華經の教えを末代、末法万年の人に伝えなければならぬ。形見として伝えなければいけないということで、そうした内容を書くわけです。

その翌年になりますと、だいぶ待遇も改善されます。そこで「本尊」と「戒壇」と「題目」の意味をあらためて明らかにします。これを「三大秘法」と言います。これを書き表わしたのが、翌年の『観心本尊抄』という書物です。『開目抄』『観心本尊抄』で大体日蓮の教えは、尽きている訳ですが、それに至るまでの二十数年間に、いろいろな体験を通じて、法華經の予言（これを法華經の未来記と言います）を明らかにしてきたのが、日蓮の生涯であります。

身延時代になりますと、これらの内容を練り直して平易に書き表しております。身延時代は、一面では非常に穏やかな時代なのですが、一面ではやはり、絶えず鎌倉と連絡を取っておりまして、日本が一体これからどうなっていくのかということを考えていくのです。それは何故かという点、日蓮ははじめから社会につよい関心を持ち、人々の代表として考えてきたということがあります。それから、そもそも海の人であるということがあったと私は考えています。既に『立正安国論』を呈出して暫くしてから、どうも蒙古が攻めてくるらしいという情報があったのではないかと思います。実際に蒙古の使者が我国に来るのは、日蓮が伊豆に流罪されていた四一才の時です。その時に親鸞聖人がお亡くなりになっています。その後も蒙古からの国使は何回も来ています。

日蓮が身延に入りました時は五三才です。その秋に文永の役がありまして、蒙古が攻めてきます。蒙古は高麗軍の隊と一緒に攻め、宍岐・対馬を占領しまして、更に福岡の博多へ上陸しようとしたのですが、ご存じのように台風が来まして、日本は助かったということです。それから弘安四年（一二八〇）に蒙古がまた来ています。

海は陸の交通と違って、特殊な連絡があるようです。従って恐らく日蓮のもとにさまざまな角度から情報が集まっていたように思います。蒙古がどんなふうに関日本を攻めようとしているのか。或は朝鮮半島の情勢はどうなのか。そのようなことを非常に研究していたことと、法華経の予言とを重ねていったのではないかと推理したいのです。

## 六

日蓮は六一才の時に、昔の地名でいえば、武蔵の国池上、現在の東京都大田区池上で入滅いたします。

日蓮の事跡は何回か親鸞聖人と触れ合う点があります。その一つは日蓮の体が衰弱してきたので、身延の山を降ります。長年にわたる冷えと栄養失調からの慢性の下痢に悩まされたのを、周囲の人が見るに見かねて、温泉療養をすすめるので、日蓮は山を降りるのですが、その途上で池上で入滅するのです。「常陸の湯」といまして、親鸞聖人



の居られたあの稲田に近い、笠間の先にある、温泉（鉱泉）に行く筈だったと推定されております。信徒の波木井氏の所領があった関係かと推測されています。そんなご縁があります。

それからもう一つは『立正安国論』を書いたきっかけは天災地変とともに、大飢饉があったからであります。そのとき、日蓮は若かったわけですし、この事態を何とかして打開しなければと言う思いが強かったと思います。ところが、大飢饉という事態は親鸞聖人も直面しているわけです。稲田の庄の農民から京都の親鸞聖人への手紙に答えて「ただひたすら念仏を称えなさい」と言っておられる。非常に対照的な対応だと思えますが、その辺が一つの接点とということになるかと思えます。

日蓮は非常に歴史にくわしく、先程言いましたように、釈尊に三つの徳があるということを非常に具体的に考えています。「二代五時図」という図を門下の弟子たちに書いて、説明したものが伝えられております。現在、日蓮の自筆が六点あり、それ以外を加えると十数点になります。

例えば「主」というのは、主上・天尊・世尊ということであって、「八虐に違す」とあります。そしてインドでは魔醯修羅天（マヘーシュベラ）とか毘紐天（ヴィシュヌ）・大梵天・第六天・帝釈天、それからお釈迦様の祖父の師子頰王とかお父さんの浄飯王とか、こういうイメージなんだよと示しております。それから中国では、三皇・五帝・三王という歴史以前の理想的な皇帝とか、日本では神武天皇というイメージである。しかしこれらはまだまだ局地的なものであって、これはもっと高い意味として認識されねばならないということです。つまり、釈尊においてこそ真実の「主」の徳が顕現されたということです。

次に「師」というのは、外道においては数論・勝論、それからジャイナの教祖たちを含めた六師外道。中国では四聖だとか周公旦・孔子・顔回とかいうイメージである。こういう人たちはそれぞれ立派なんだろうけれど、それを遙かに超えてこの世の精神が語り明されねばならないということです。その真実の「師」の徳をお持ちの方こそ釈尊であ

ることを明らかにするのです。

その次に「親」というのは、父母・兄弟、それから叔父叔母・伯父伯母を「六親」とか「八親」と数えます。こうした親愛感というものは実は非常に危ない、頼りないものです。動物の子供が食べてしまう例が中国の史書に引かれて、人間社会でも情愛は頼りないことが語られています。本当の意味の親徳は積尊の慈悲において明らかになるものだというのです。このように主師親の三つの徳を具体的なイメージを通して、語ろうとするのです。

曾我先生が日蓮は自力教の上で最高のモデルだと仰っています。その意味を、私どもは噛みしめて勉強させて頂きたいと思っています。

我々の日本仏教というのは、それぞれ特色をもって展開しています。折角、日蓮聖人の内面的な貴重な教えがあるにもかかわらず、今日、それが十分に認識されているかどうか疑問です。曾我先生などのお教えを参酌しながら仏陀の教えを勉強させて頂きたいと思うゆえんです。

直観的に日蓮の精神にふれた人も多勢おります。宮沢賢治という人は、おばさんと幼児の頃から毎日一緒に浄土真宗のお勤めをするものですから、三才の時に正信偈を暗誦したというんですね。そして少年時代から島地黙雷・暁鳥敏・島地大等といった方々の講話を聞法したのです。毎年夏にはお父さんたちの主催する仏教講習会に参加して勉強したのです。ところが、社会实践をしたい気分が非常に強くなって来た頃、島地大等先生の国訳妙法蓮華経を、父親の書棚で見出したのです。このことが機縁となって法華経に傾倒して行きます。そして先程申しました田中智学が指導していた国柱会が東北の方まで非常に影響を及ぼしたものですから、それに入会するのです。それだけでは満足できませんで、後に花巻の身照寺という日蓮宗のお寺の基となった法華堂を建てています。

もともと宮沢賢治は内面的なものを持っているのです。そうした面の上に、社会实践を追求して行き、法華経に傾倒して行くのです。日本仏教の現代的な展開という意味で、私としては、この点に非常に興味をもつのです。浄土真

宗の信仰によって培われた内面性の充実が、社会実践をめぐる苦闘の中で法華経信仰へと転換して行くわけですね。私としては信仰・信条の問題とは別に、日本仏教の思潮として考えなければならぬ課題がそこにあると思っております。

予定の時間を超えて恐縮でございます。日蓮は決して悪口のための悪口を言うために四箇格言をとなえたのではありません。先程申しましたように、三大誓願というものが基にあるのです。その誓願を實踐する上で体験していったのが日蓮の生涯であり、その中で熟成されたものが日蓮の内面的なものであるということを申し上げたいのであります。どうも大変長い時間、御清聴有難うございました。

(本稿は一九八九年十一月九日に行われた仏教学会公開講演会における筆録を渡辺先生に加筆是正して頂いたものである。)